明治三十八年一月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

萬軍のエホバのたまふ、これは權勢に由らず、能力に由らず、我靈に由る也

第二卷第七號

萬國女子青年祈禱週日(英文、邦文)　社説
萬國女子青年會祈禱順序(邦文)
未だ應驗なし(英詩)　マクドナルド譯
聖書研究(邦文)　野口幽香女史談
幸福なる生涯(邦文)　河井道子
米國女學生生活(邦文)
ヘレン、ケラー(英文)
理想的家庭における安息日(邦文)　古田富子
祈禱の應驗(英文、邦文)
月草(邦文)　しづのや
雜錄―女子青年會夏期會(英文、邦文)―小石川女子傳道學校內女子青年會創設の狀況(邦文)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

『明治の女子』は日本基督敎女子靑年會の創立委員が發行する月刊の聖書研究錄なり。

『明治の女子』は一年分十二冊の定價郵稅を併せて金五十錢。

發行所は東京市麴町區土手三番町十五番地

日本基督敎女子靑年會の創立委員は

委員長 ホイットマン嬢
幹事 ルキス嬢
ソージントン嬢
ウエスト嬢
津田(梅子)嬢
花井夫人
ヘルム夫人
フィシャー夫人
平野嬢
小崎夫人
エリス嬢
ソーパー嬢
フェルプス嬢
ハミルトン嬢
ザーフルー嬢
佐藤(錦子)嬢
河井(道子)嬢
モリソン嬢

萬國基督敎女子靑年會日本支部幹事
同上
エー、シー、マクドナルド謹

明治三十八年十月廿八日印刷 〔定價 一册四錢 郵稅五厘〕
明治三十八年十一月一日發行 〔一年分(十二册)郵稅共五十錢〕

東京市麴町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人 エー、シー、マクドナルド
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社 國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子 第二巻第七號 明治三十八年十一月一日發行

明治の女子

萬國女子基督教青年會祈禱週日

（明治三十八年十一月十二より十八日まで）

順序

●十一月十二日（日）。基督の力。

馬太傳廿八〇十八。約翰傳十六〇卅二。哥林多後書二〇十四。

讃美―團體として、また個人として、我等が抱くさまざまの要求を滿足せしむる力のみなもとは、すべてのことを看過せざる活ける基督なること。

祈禱―おのれの民を勝利に導きたまふ主のみ力に頼る心が、青年會一般に熾んならんこと、及び主のみ名によりて勝利を望み、これを得んとて進むべき勇氣を與へられんこと。

萬國女子基督教青年會委員がその職責を完うすべき明識高見を與へられんこと。

明年五月十六日より廿一日まで、佛國巴里に於て開設する萬國女子基督教青年會々議が、主の聖旨に從つてよくその計畫を遂げ、且つこれに出席するものが、悉く神のみ靈に滿たされんこと。

●十一月十三日（月）。信仰の力。

馬可傳九〇廿三。路加傳一〇四十五。馬太傳九〇廿九。

祈禱―我等が日毎に送る生活に於て、また他人のために盡す處の勞役に於て、絕えず榮光の主をこよなく信頼すべき特權を用ゐ、艱難辛苦に遭ふ毎に、却つてこれに依つて主の榮光を現はし得んこと。

亞米利加のため。

●十一月十四日（火）。神のみことばの力。

提摩太後書三〇十六。希伯來書四〇十二。提摩太後書三〇十五。使徒行傳廿〇卅二。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

祈禱─神のみことばが、各會員の精神行爲に無上の尊嚴を保たんこと。

歐羅巴のため。

●十一月十五日(水)。十字架の力。

加拉太書六〇十四。彼得前書一〇十八─十九。約翰前書一〇七十九。羅馬書五〇九。希伯來書十三〇十二。默示錄十二〇十一。一〇五─六。

祈禱─青年會が、常にキリストの十字架を以てその光榮となさんこと、及び祈禱同盟の各員が、そのことばとおこなひによりて、神の子イエス、キリストの血に、罪を赦し、かつこれを潔むる力あることを證し得んこと。

歐羅巴のため。

●十一月十六日(木)。聖靈の力。

哥林多後書三〇三。羅馬書八〇十。使徒行傳一〇八。馬太傳七〇十一。

祈禱─各青年が神のみ靈の我等を勵まし、かつ潔め給ふ力を感得せんこと、及びキリストを離れたる人々が、新にたち歸りて、主の力を世に傳ふるに至らんこと。

亞細亞のため。

●十一月十七日(金)。愛の力。

約翰第一書四〇八。約翰傳十五〇十二。哥林多後書五〇十四。雅歌八〇六。

祈禱─我等がキリストの愛に勵まされて、互に相事ふる心を熾んならしむるを得んこと、及び我等のうちに、約翰傳三〇十六に於けるたうとき福音を提げて、暗黑なる異敎國とモハメット敎國とに進み入るものの起らんこと。

亞弗利加のため。

●十一月十八日(土)。祈禱の力。

約翰傳十五〇七・十四〇十三。馬可傳十一〇廿四。

祈禱─信仰より出づる祈禱が、青年會の各部は勿論、各員の生活に於ても、大に重んぜられんこと、及び神の王國が、この一週間に於ける祈禱によりて、いよ〳〵擴大するに至らんこと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

墺太利のため。

聖書研究

使徒行傳

◉概觀。一。

聖書はすべてその中心たるイエス、キリストの光によりて研究せざるべからず。

福音書

イエス世にありて行ひ、かつ教へ始む。

イムマヌエル(我等と共にある神)。

感官によりて知り得る主の存在。

使徒行傳

イエス天にありて、尙ほ行ひ、かつ敎ふ。

聖靈(我等の衷にある神)。

在らざる所なき主の内住。

凡ての權を我に賜れり。萬國に行きて彼等に敎へよ。世の末まで常に爾曹と共に在る也。

◉概觀。二。

使徒行傳の趣意

使徒行傳一章一節

一章

紀元三十年 エルサレムに於けるペテロ	ユダヤ人に傳道す 然れども異邦人を排斥せす
紀元六十四年 ローマに於けるパウロ	異邦人に傳道す 然れどもユダヤ人を第一とす

二十八章

平和の敎會。

迫害の敎會。

離散の敎會。

傳道の敎會。

發展の敎會。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

使徒等は何を證せしや。
彼等はその見聞したる處を證せり。

◉概觀。三。

地上の敎會

馬太傳十三章十六、十八節。

我が敎會をこの磐の上に建つべし。陰（よみ）の門はこれに勝つべからず。

使徒行傳一章

敎會の待望。

使徒行傳二章一―三節。

聖靈を受く。

使徒行傳二章三―廿八、卅一節。

起ちて働く。

主彼等と共に働き、尚ほ其働きを繼ぐ。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

◉一。使徒行傳の記者

使徒行傳一〇一―五を讀むべし。この諸節を見れば、本書の記者が、さきに詳しき基督の經歷（一節）復活當時の狀況、聖靈降臨の約束（四節）、昇天（二節）等を擧げたることを示す。路加傳廿四〇十三―五十三を讀んで、使徒行傳との連絡を見るべし。

本書がテヨピロに向つて獻げられたるを見よ（一節）路加はその福音傳をもまた彼に獻げたり（路加傳一〇一―四）。

されば此の二書が同じく路加によりて記されたることを推測するを得べし。而してまた初代の敎會よりかく信じ來れる也。使徒行傳は福音書の續編ともいふべきもの也。本傳一〇一にいへる如く、福音書は、基督がこの世におわりし時、自ら創め給ひし敎訓と事業とを記錄したるものにして、使徒行傳は、基督が昇天の後、聖靈の力を以て、繼續し給へる事業を記載したるもの也。

路加とは何人ぞ。哥羅西書四〇十四。路加傳を讀めば、諸處に記者が醫者として、柔和なる、純潔なる、同情に富める性格のほのめけるを想見する也。基督の誕生についていかにもうるはしく描きたるも路加也、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

また基督が同情を以て、すべての人々に接觸したまふさまを述べたるも路加也。

哥羅西四〇十四及び腓利門書廿四を讀むべし。
路加はパウロの友にして、彼とその働きを共にせり。彼はパウロを知りそめしより以來、最後に至るまで、常にパウロに向つて最も忠實なりき。パウロがその永眠前(提摩太後書四〇六)にかき贈れる最後の書に、路加は彼の唯一の伴侶たりしとを記せり(提摩太後書四〇十一)。パウロ、シラス、テモテが第二回の傳道のため、トロアスに到着したる時に、この同志を『彼等』と呼ばずして、『我等』と記せるを見れば、此時既に路加がパウロと交り始めたるを證するに足る。パウロは恐らく此地に於て、初めて路加に接したりしなん。而して路加はこの時に悔改めたりとおぼし。されど口碑の傳ふる所によれば、路加はスリアのアンテオケに屬しゐたりしが、異邦人にして、基督教に歸依したるものの中、彼の如きは、その最初の一人なりき。後トロアスに來り、こゝにてパウロに會せりと。兎も角、パウロがトロアスに於て幻を見たる後、路加は彼に從つて歐洲に赴き(使徒行傳十六〇九—十)、彼と共にピリピに留まれり(使徒行傳十六〇十三、十六)。されどパウロが深くマケドニヤの內地に入りし時、路加はトロアスに歸れるが如し。こは使徒行傳十七〇一に、再び「彼等」と記せるをもて知るべし。第三回傳道の終に、路加はピリピに於て再びパウロに伴ひしが如し、何となればパウロがエルサレムに歸る途中、ピリピに立ちよりたる折の記錄に、彼が再び『我等』の稱呼を用ゐたるを以て也(使徒行傳廿〇五、六)。爾來彼はパウロの伴侶として、獄裡にも、破船にも(使徒行傳廿八〇一)、常に彼と共にありて、遂に羅馬に至れり。使徒行傳の記錄は、こゝにて局を結べる也。かくの如くなるを以て、パウロは路加を以て、永久の伴侶となし、最後に至るまで彼を愛したり。

彼は異邦人にして、羅馬の市民なりき。また頗る勢力を有したるが如し。然るに彼は、醫士の職を擲ち、羅馬の市民たることを止めて、主の僕パウロにおのれを

献げ、共に艱苦を嘗めて、彼を補けたり。多數の人によりて信ぜらるゝ如く、パウロの身體虚弱なりしとせば、路加の如き醫術に明かなるものが、彼と相伴ひて、常に彼を慰め、彼を助けしことは、彼の大事業を爲すに、極めて必要なりしならん（哥林多後書第十二〇七）。路加は親密なるパウロの伴侶なりしかど、使徒行傳中、彼は一言も自身のことに及ぶることなかりき。以て自身よりも、深く他人を尊びたるを知るべし。基督曰く、『兄弟の最微者の一人に行へるは、即ち我に行ひし也』（馬太傳廿五〇四十）。

路加は學者也。路加傳及び使徒行傳に用ゐたる詞は、彼が希臘の高等なる學術を修めたるを證するに足る。而してその能力は全く主に献げて、露も利己の念を交へず、主のためには、すべてのものを糞土の如く意ひしかば、（腓立比書三〇七、八）神は彼を用ゐて、その事業をなさしめ給ひぬ。されば基督の福音の傳へらるゝ所には彼の事業の幾久しく活けるなるを知るべし。人のこの世に於ける功績の大小は、その人の自ら保有する所のものによりて計らるゝにあらずして、彼が他人に與ふる所のものによりて量らる（約翰傳十二〇廿五）。我等もまた神の國の立場より、この方法を以て、すべての成功を計較しつゝあるか。約翰第一書二〇十七を讀むべし。

◉二。基督敎會の創始。

基督は昇天前に、おのが敎會を立つべき基礎をのこし給ひぬ。使徒行傳一〇八。彼はこれらの數語の中に、

（一）福音の傳へらるべき範圍――世界。
（二）使徒の事業――證明（あかし）。
（三）事業の原動力――聖靈

この簡短なる一節は、また使徒行傳全體を概括せるものと云ふべし。使徒等は主に對する從順の念に滿ちて、自ら主に就いて見聞せし處を世の人々に證せんがために出でゆけり。彼等の目的は只これのみ、他に何等の欲する處なかりし也。彼等は主の力によらば、人々の心を改善するの難からずと信じたれば也。使徒行傳二〇四十七。五〇三十二。馬可傳十六〇二十。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

使徒行傳は、如何にして基督教が猶太の一宗派より化して、世界の大宗教となりしやを記録せるもの也。即ち使徒等がユダヤの中心たるエルサレムにその事業を創めてより(使徒行傳二〇五—三十六)、遂に異邦人の大傳道者パウロが、當時全盛の羅馬に入りて、十字架につけられ給ひし基督について説教したる事蹟に及ぶ(使徒行傳廿八〇十六、卅—卅一)。

傳教の原動力は聖靈也。路加傳廿四〇四十九。使徒行傳一〇四。耶蘇は使徒等に約するに、神の事業と計畫とを悉く知らしむべしといはで、(使徒行傳一〇六、七)、その事業を遂行すべき力を與ふべしといひ給へり(使徒行傳一〇八)。然り、すべての事は彼等の知るべき處にあらず、彼等は只見し處、聞きし處を證すべき力を與へらるべかりし也。馬太傳廿八〇十八—廿に曰く『天のうち地の上の凡ての權を我に賜れり、…… 夫れわれは世の末まで、常に爾曹と偕に在る也』。

使徒行傳は、また約翰傳十六〇七及び十四〇十二にある基督の言を實現したるもの也。『爾曹は此より大なる事を行すべし、蓋はわれ我父へ往けば也』。肉の基督去りて、靈の基督は一層近く使徒等に臨み給ふに至りぬ。そは彼イムマヌエル—神我等と共にあり—となりたれば也(馬太傳一〇廿三)。基督去りて後、聖靈我等に臨み、親しく我等の衷に宿りて、我等の思想行爲を治め給ふ(約翰傳十四〇十六、十七。哥林多前書六〇十九、廿)。

基督は征討の陣營として教會を創起し給へり。世界は彼の戰場にして、人類は彼の囚人たる也(以弗所書三〇一)。我等の武器は肉に屬するものにあらずして(哥林多後書十〇四)、勝を制する靈の力也(以弗所書六〇十—十六)。使徒行傳は即ちこの勝利の歴史也。されどこれ單に戰爭の初期にして、爾來これを繼續して、すべての敵壘を陥れ(希伯來書十〇十二、十三)、王その榮光の冠を戴くの時に及ばざるべからず。而してこの軍隊を統率するものは耶蘇基督にして(使徒行傳二〇廿四)、彼によりて救はれたるものは、皆なその兵卒也(提摩太後書二〇三、四)。然るにこれら初代の少數な

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る使徒等は、この教會の大磐石の上に神の國を建設すべき最初の工師となりぬ。而して彼等が第一の務は、神命を待つの一事なりき。馬太傳十六〇十六、十八。哥林多前書三〇十一。

使徒行傳第一章は、教會の待望を、第二章一―三は教會が神より力をうくることを、第二章四―第廿八章卅一は教會の働きを述ぶ。馬可十六〇廿にいへる如く主は彼等と力を協せ、奇跡によりて道を堅くし給へり。

我等は今日、彼等と同一の戰、同一の力、(馬太傳廿八、十八)、同一の主(希伯來書十三〇八)を有せり。されば、我等は宜しくおのれの心を堅くすべし(彼得前書一〇十三)。而してこの善き戰をたゝかひ、信仰の勝を得たるものには、主が報ゐ給ふ處あるべきは疑なし。(提摩太後書四〇七、八)。

◉三。教會の待望。

使徒行傳一〇四を讀むべし。約束の待望。使徒行傳一〇八を讀むべし。爾曹力を受くべし。

使徒行傳一〇一―十一を讀むべし。この數節は、路加傳に詳述せる主の復活、昇天、再臨の約束を摘錄せるもの也(默示錄廿二〇廿)。

使徒等は主より待つべしと命ぜられ、これに從ひてエレサレムに歸りぬ。第一、彼等は大なる歡喜を以て歸れり、路加廿四〇五十二。第二、彼等は互に全く心を偕にせり。使徒行傳二〇一。また馬可傳九〇卅三、卅四及び十〇卅五―四十五を參照すべし。第三、彼等は祈禱の裡にありたり。使徒行傳一〇十四。

婦人が基督教に於て、いかに重要の地位を有するかを見るべし。この祈禱の際、婦人は男子と共に、心を同うして、主の約束を待望したり。使徒行傳一〇十四。婦人に向つて一個の地位を與ふるものは、世に基督教あるのみ。主が十字架にかゝり給へる時、最後までかしこに留まりしものは婦人なりき。約翰傳十九〇廿五―廿七。また最初に主のみ墓に詣でしものも婦人なりき。約翰傳廿〇一。路加傳廿四〇一。ある日、基督はうち疲れて、一人の悲める婦と語りて、おのれのメッシヤなることを告げ(約翰傳四〇廿六)、靈的禮拜のた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うとき教を說き給ふ。約翰四〇廿三ー廿四。また約翰傳八〇一ー十一及び十二〇三ー八を讀みて、他の例を參照すべし。婦人は特に基督に對して忠實ならざるべからず、何となれば、婦人は人生をしてこの浮世の辛酸に耐へしむるに足る、あらゆる慰藉の資質を有すれば也。而して基督の世に出でたるも、またこの平安を人々に與へんがためなりしにあらずや。馬太傳十一〇廿八ー卅。

使徒行傳一〇十五を讀め。ペテロは立てり。彼は基督在世の時にも、またこの時に於ても、使徒等の主領たりしが如し。されど試みに想へ、彼がわれ主を知らずといひて、おのが難を逃れんと欲せしより、未だ二個月を經ざるに、今彼が毅然として群衆の前に說く處、何ぞそれかくの如く壯烈なるや。(馬太傳廿六〇六十九ー七十四)。げに彼の志操は堅確ならざりき。されど彼は主の力によりて、偉大堅實の人と化したる也。然り、基督は全く救ふの力あり。希伯來書七〇廿五。彼がペテロを救ひて、忠實なる主の働者となしたるを見れば、その救の力の大なることは、疑ふの餘地なし。

使徒の職。使徒行傳一〇廿二。及び一〇八。證人とはその見し處、聞きし處を證するもの也。殉教者といふも、はじめは單に證人の意なりしかど、彼等の多くが、おのが信仰のために死にたれば、後この語は『證明のために死たるもの』の意となれる也。使徒等は事の實際を人々に證すべき命をうけたり、殊に主の復活の如き、また主を信ずるものをして、全くその性格を改善し得るみ力の如き、これらを親しく見聞したるものは、只彼等のみなりしを以て也。ピラトが約翰傳十八〇卅七に於ける『さらば爾は王なるか』との審問に對する主の答を見よ。また約翰傳廿〇廿一を讀むべし。

尙ほ心をとめて、使徒行傳第一章を通讀すべし。四、八、十一、十四、廿二節。この一章は從順について、ー『約束し給ひしことを待つべし』、信賴についてー『聖靈なんぢらに臨むに因りて、後爾曹能力を受くべし』。祈禱についてー『彼等偕に心を合せて、恒に祈禱を務めたり』。義務についてー『共に其甦りし事の證人』。期望に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ついて――『このイエスは、爾曹が彼の天に昇るを見たるその如く、亦た來らん』を敎ふるもの也。馬可傳十三〇卅三―卅七。

◉四。敎會の受靈及び事業。

使徒行傳二〇一―四を讀むべし。これイエスが約翰傳一五〇廿六―廿七に於て語り給ひし如く、主の大なるいちじるしき日の來れる也。約翰傳十六〇七―十一。十四〇十二。主は形骸の束縛を脱して後は、聖靈を以て、この世にゐ給ひし時よりも一層大なる力をその事業の上に注ぎ給へり。主が我等と永遠に密接なる關係を保ち給ふためには、その形骸を脱し給ふかた、却つて大に便なりしや疑なし。概觀第一を見るべし。希伯來書七〇廿五。

使徒等は今主の命に從ふに足るそなへと力とをうけて、福音を傳ふべき第一の機會に遭遇したり（使徒行傳一〇八）。而してペテロの如き、初めは主に對して温情を保ち、後またわれ彼を知らずといひ、今はいよ〳〵その非を悔ゐて、主の從順なる友となり、おのれの力に依らずして、ひたすら主の力に賴り、基督敎ありてより以來、こゝに最初の説敎者となれり。げに神は世の强者を驚かさんがために、却つて弱者を用ゐ給ふ。哥林多前書一〇廿六―廿九。

説敎。使徒行傳二〇廿二―廿四及び卅二―卅六を讀むべし。説敎の組織を見るに、ナザレの耶蘇とその事業（廿二節）、彼の贖罪（廿三節）、彼の復活（廿四、卅二節）、彼の昇天（卅三節）、及び聖靈に關する約束の遂行等を述べたり。今廿一節を讀むべし。こゝに『凡て主の名を呼賴む者』とあるは、その範圍甚だ廣し。誰かかの人はこの範圍の内にあらずといひ得るものあらんや、いかに價値なきものといへども、神の救に與り得ぬものとてはあることなし。約翰傳三〇十六を讀みて、神がいかに人の靈魂を貴び給ふかを知るべし（馬太傳十〇廿九―卅二）。

聖靈がペテロによりてはたらき給へる結果を見るに、第一、人々がおのれの罪を悟りしこと（卅七節）。第二、人々が悔改めしこと（卅八―四十一節）。第三、人々

が堅く信仰を持續せしこと等也。基督はこれらのことについて、さきに弟子等に約束し給ひき。約翰傳十六八、九。馬太傳十一〇廿八―卅。六〇卅七。約翰傳十〇九、廿七―廿九）。

ペンテコステの日に、聖靈降りて信徒の心に宿り、爾來基督の敎會を去り給はず（馬太傳廿八〇廿。約翰傳十四〇十六）、今尙ほ敎會のうちに働きて、人々をして罪を悔ゐ、生命の道に進むべきことを敎へ給ふ。彼はイエス、キリストを世にあらはして、かの初代の悔改者が『我等何を爲すべきか』といへる如く、今も大なる力を以て、その福音を人々に知らしめ給ふ。而して我等は使徒行傳二〇廿八にいへると同じき答をペテロより聞く也。神の靈にして、果してかのペテロが狂熱、虛僞、褻瀆を化して、ひたすら神に事ふるの人と爲したる力ありとせば、誰か神の救贖力の完からざるを嘆ずるの要あらんや。使徒行傳二〇四十一を讀むべし。また二〇八―十一を讀みて當時集まれる人々の種別を知るべし。いづれも同じく――おのれを正しとせるパリサイ人も、極惡非道の罪人も――皆なその罪を悟りぬ。神の眼には、我等皆な罪人也（羅馬書三〇卅三）。されどイエス、キリストを信ずるによりて義とせらる（羅馬書三〇廿四及び約翰傳三〇十六）。

我等は使徒行傳を研究して、基督の敎が、漸次人類の心に擴充せられ、かつ神が彼等を愛せし如く、また互に相愛するに至れる跡を見ることを得。約翰第一書三〇一―三。

すべての人、この望を以て、おのれを潔くす。我等もまた、その思想、言語、行爲の上に、日々高潔の光を加へつゝある人々の中に數へらるべきや否や。馬太傳五〇八及び腓立比書四〇八―九。

講演

幸福なる生涯

十月十七日東京麹町一番町敎會女子青年會講話會に於て華族女學校附屬幼稚園主任者野口幽香女史の懇切なる敎訓談ありて大に聽衆に感動を與へたり今玆に其大意を揭げて以て讀者の淸覽に供す。

皆さんが東京に來て勉强なさるに色々の事がある。幾多の女學生の中には上京して樣々の華美の風を習うて罪を犯しつゝ勉强して居る者もあり、又貧書生で牛乳配達をして男か女か分らぬ樣な衣飾(きかざり)をして勉學して居る者もある、或は新聞雜誌に惡評される如き質に淺ましい事をしで勉强して居る者もある。皆東京で勉强する、何のための勉强かしら? 學問すると云ふは人間らしい人間に成り其道を踏みたいために學問するのである事は皆さんの御存知の事であります、併し此の目的で上京する人は寡い、只今在るよりも高い地位に成り度いと云ふが多數者の勉學目的である、誠に呆然とした目的で上京する故危險なのであります、幸福な生涯を送りたいといふ上京學問は或意味に於ては大變な事になります。

扨て幸福とは何か。

第一、金錢の幸福、如何なる人でも聖人君子でも心の奧底に此幸福を希はぬ者はない。併し又其慾望にも種類が色々あります。曾て某音樂會の切符を某夫人の許へ買て貰ひに參りました。幾枚あるかとの御尋に五十枚と申たら皆買はうと申された時に實に自分は一度は斯る金持に成て人が持て來た切符を皆買上る程になり度いと思うた事がある、自分は買ひ度ても一枚も買ふ事が出來ないで外へ周旋致しませうと返事しなければならない場合もある。貧民事業に從事して居ると色色の方面に金が欲しい。米國には一人にて大學を建立し書籍館を維持して行くと云ふ金滿家もあるが、併し誰でも滿足が出來ない、千人中一人其財產で滿足すると云ふ者はあるかなしかであります。然れば金錢丈で本當の幸福とは云へぬ事になります。

第二、家庭の和合、夫婦親子兄弟の和合は實に幸福である、金錢の幸福も自分の心掛に依りて幾分か得られるが、第二の幸福は金錢以上のもので此も又自分の心掛で大部分は得られる、しかし世間には親が惡い爲に子が困つて居るもあり又子の惡い爲に親が泣て居る事は有勝ので、夫婦でもこれはと思つて感服するのは誠に珍しい、何れも遠方から見ると皆好いが、さて近く

で見ると大層に違ふ點があると云ふも、是は他人を相手の事ゆゑ唯自分丈では行かぬ。或點までは望んで得られますが、是を以て人生の幸福と思へば大間違であります。

第三、健康、三度々々食を甘く食べ夜は好く寝るのが當前の樣に思ひますが、一度病氣をして見ると實に健康は幸福の要素で、健康程よいものはないと思ひます、人は一度は死ぬ程の病氣に逢ふのがよい。併し健康も自分の注意養生にて風を引かぬ位の事は出來ますが不意に病を得て自分以外より此病魔が來る事がありますす故に健康も又幸福として賴む事が出來ません。

第四、名譽、誰でも人に譽られて嬉しくない人はなく、惡く云はれて喜ぶ者もありません、あるとすれば餘程自分を鍛錬した人で、普通一般の人ではありません、夫故に名譽も幸福ではありませうが眞の幸福は名譽で却々得られるものではありません。

それでは此四ヶ條共に一身に集合したならば幸福であり滿足が出來るであらうかと云ふと、大層恐ろしい事が迫つてくる、即ち死ぬと云ふ事で、物質上の滿足を得ますと實に死にたくなります。此死と云ふものは何時誰の上に及ぶものか分らぬ事は毎日々々實見して居る處です、斯く思ひますと安心の出來る事はありません。到底人間は死んでしまへば其が却て心易いと云うて墓無とか浮世とか申て厭世主義に成て華厳の瀧壷へでも飛入り度くなるのは勿論の事で、何故に永く苦んで何の益になるだらうと思ふ樣に成つて來ます。

斯く述べ來りますと世を樂しく元氣よく活潑に送らうと致すには何の道がありませう。即ち全智全能の神を知ると云ふより他に道はありません。此神に依りて我等は不死の者であるとの事を敎へられ、自分は如何に貧乏であり人々から輕視されても御神の寵子であるとの確信が出來其處で始めて安心を得られます。神に愛せらるれば、假令癩病患者でも貧乏人でも宜しい、又酷い姑があつても、又悲むべき子供を以て居てもよろしい、神に依て安心を得る事が出來ますから。誠に苦しい病氣に罹つて死だ人が泰然として一言も苦痛を

發しなかつた爲に、その醫師看護人をして神を認識せしめた例は度々ある、斯く人間が強い人になれるのは神を知るより外はない。名譽の滿足は尙更の事で神を知らねば到底滿足などは夢にも見られない。自分よりも無學無智の者が自分よりも遙に昇進する、卑屈な人が持囃される、正義の道を歩いて却て嘲けらるゝ等皆不滿の種子である。然し神の御意を行ふが唯一の目的と云ふ樣になると他人の批評は何かまふものかと舊怨から超脫して仕舞ふから實に幸福であります。

然らば神を知てから辛い事があるまいか。否益々辛い事は殖えるのである。何故と云へば、今迄は罪とは惡い行爲をなしたものと考へたが、神を知りてより心に惡を思へば其想が既に罪となるから罪の範圍が廣くなり從て良心が苦みを感ずる事が多くなる。併しまた幸福なる側面が何に對しても見られます。貧乏も疾病も苦しくはありますが又それに伴ふ幸福を見る事が出來ます。或人は私を幸な者と云ひ、或人は私を不幸者と申ます。私は自分で自分程幸福な者は無いと思ひます。私の幸福は私が幸福だと思ふ其事であります。身に少しく病氣のある爲に好な旅行も出來ます、人々が「貴女は御病氣御全快でゐられますか」と申ます私は「幸に少し殘つて居ります」と返事します、實にかく何事にも感謝が出來ます。それかと申して何んな困難に會合しても一々光明が見えるかと云ふと、それは見えない事もある、神樣を知て居る人にはそれは解するに難くない、即ち親が子供を叱る時の事を思ひ較べると直ぐ了解が出來ます。

それならば我等は學問も何もしないで、只祈のみして世を送つてよいかと云ふと、決してさうは行かぬ、幸福を感ずるのにも頭が開發して居らねばならぬ次第であります、學校にて茶も花も歌も習ふのはよろしいが天地の美妙を感じて歌でも讀む樣になるなら宜しいが唯天狗俳諧で此處から一句、其處から一句と拾ひ集めて萩の下葉の雁のなにのと、雁の聲など聞いた事もないのに書き列ねる、これが何の學問だらう、決して學問ではない、手紙一ツもかけないで、かゝる事のみ皆

の氣に入るのは實に悲しい事だ、近頃才媛集とか何とかが、却々賣がよいときくが今の女學生が今少しく眞面目な書物でも讀み聖書を喜ぶ樣に成つて欲しい。それかと云うて又トロストイのバイロンのと譯も分らぬのに云ふは至極宜しくない、もう少し分る樣に成つて人生問題を考へて呉れるとよいと思ひます。私の知つて居る某女學生は病氣になり死んでも田舍へは行かぬと云ひ終に東京で死んだ。今一人は田舍へ行く樣になつた時に喜んで行つた、前者は理想は高かつたかも知れぬが學問をしまちがへた樣な者で、後者は實に善良の途を取つた者と云ふべきであります。

新聞雜誌に名や寫眞を掲げられ名聲赫々の人々は社會の犧牲であつて何も自由はない。名譽の裏面は涙であります、人間は自分の思ふ通りには行かぬもので、天運もあり色々と異つた位置に立ち、百姓の妻にもなり又名譽の地位を占める者もありますが、如何なる境遇を問はず幸福な生涯を送つて欲しい。(河井記)

藻鹽草

米國女學生生活

河井道子

屢々友人等に米國實驗談を強請せらるゝも絶えて應ぜし事なけれど己が利益せし小柄を他に分配せぬは慾深きわざなりと諭されしまゝ是より順を追うて少しく綴り出でん、幸に一讀の榮を給ふ姉妹あらば幸にこそ。

我校ブリンマー

米國の秋と云ふと忽ち心に浮ぶのは、四年間の長い樣な短い月日を送つたカレヂである。

去る者は日々に疎しとは道理ならむも、其轉比例に、去つて益々戀しさは御互の學校であらう。既に家庭を造られし諸姉はいざ知らず、然れど社會の厄介者として喋々論せらるゝ獨身者(スピンスター)連には學校生涯を追懷して愉快を感ぜぬ者があらうか。毎週の作文に責めたてられ、敎師に苦き顔され、試驗に惱まされし事も今日にして

思へば一つとして面白く無いものない。順風に帆を上げて鏡海を渡るやうにして卒業證書を手にしたのなら如何で學校聯想が興味多い筈があらう。自分も學校で苦しまされた丈學校を思ふ情が厚い。私が居たカレヂ！それは幾程稱贊しても足りない、第一建築物から申ても非難處か數多の建築家が態々視察に參る程で華盛頓府に近來設立された華盛頓大學も我校の建築に準據した一事を以て明了である。この中世紀の城の如き優美で嚴肅な建物が紅青の蔦で絡まつて居るその美しさ、雪の降る迄青々として居る何千坪の芝生に取り圍まれて屹立したる高塔教堂、楓の並木を通ぬけ菫菜と延命菊の岡を隔てし運動場、春は其處でテニスをし、秋はハキーやバスケットボールの試合をし、冬は變じて氷池となり教師生徒の辷合、其場を見下す教員の住居、一として美の調和を損ずるは無いが中にも、別して床しく氣高く上品で雅美優麗なのは西に茜さす黄昏に夜服を着けし女學生が此處に二人、彼處に一群と夕風に羽衣の裳を輕く吹かせながら、或は歌ひ或は笑話しつゝ一日の苦しき課業を忘れた樣に五十萬餘坪の校園を逍遙する事である。其有樣は恰もテニソンの「プリンセス」を活人畵にした樣で自分は恍惚として見て居つた事は數知れない。毎度友人等と云ふ事は「プリンマーの秋の景色に過すものはない」と。冬に成ると「プリンマーの冬は實に面白い」と。又春が廻て來ると「駒鳥の歌につれて菫菜や、牛酪草や、延命菊や、櫻、桃、林檎と一時に咲くこんな美しい春が他にあるかしら」と。夏も綠滴たる計の仙境に相違無きも六月上旬より九月下旬まで夏休の事とて、そこに居りし事はありません、何時も六月に生徒が學校を否々ながら去るが常です。

此學校は何處に在るかと云ふと、米國ペンシルベニヤ洲費府を去る僅かに八哩の至極閑靜な土地にありて汽車は半時間毎に費府へ發しますから便利はよし、飲用水は費府の有名なる濁水に反して上々ですし、景色はよし、空氣は勿論よし、人家はよし、人格はよし、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何でもよし盡で學校の爲には最上の場所です。

十月には新學期が始まりますから大概九月廿八九日頃に寄宿生は歸校致します。日本の學生の樣に六疊に三人も押込められるから、行李一個夜具と机と云ふ手輕な譯には向の學生には行きません。プリンマーでは八疊位の一室に一人との規則で、左なくば二人に三室（寐室二、書齋一）と云ふ割合なれば銘々の部屋を相當に裝飾するにはなか〳〵の仕事で三日間も費す事が屢々ある。實に子供の時代から美術の觀念を養成された米國の女學生は己が部屋の飾付に餘程思考を凝すもので、此の室内の光線が横より射るから其の額の位置はかくすべしだの、壁の色が靑故黄毛氈は不釣合とか、窓が高いから幕の吊し樣が斯くあるべきとか、或は本箱と机の木材が喧嘩するの、椅子の排置如何とか隨分六ケ敷い事を云ふが、併しさう云ふ丈皆の美術心の長じて居るのと私は感服して居りました。同じ金錢を使ふにも可成配合のよきを買ふとか又小使に充分でない學生は、決して驕つた事はしないでも、相當に部屋を座敷らしく且又ホームらしく成すには只感じ入るの外はないと思ひます。

次回より入學當時の狀態より少しづゝ記しませう。

家庭

理想的家庭に於ける安息日

古田とみ

うるはしき愛の籠れる處は、家庭ではありますまいか。家庭とは、この愛がいかにも圓滿に、かつ自由に家族の中にゆき渡つて、春の日のうらゝかに、花笑ひ、蝶舞ふ、いとものどけきさまを見るやうでなければなりません。けれども實際の家庭を窺ふと、全くこれと反對の現象が多くて、その悲慘なる樣は、目もあてられぬやうである。これは何から來るかといへば、つまる所、愛の欠乏である。家族互に我意を強くし、譲る所もなく、容す所もなく、徒らに家人を責め、兒女を叱するなど、たしかに愛の欠乏より生ずるのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然らばこのうるはしき愛は何處から、また如何して得られませうか。愛なる活ける神を信ずるの外はありません。神を信ずるのは、即ち愛の眞理を悟るので、家庭の幸福は、神人の愛を完うするより起ると思はれる。眞に人を愛するといふことは。哥林多前書十三章に說いてある眞理を實現するのである。この愛が家庭の裡に欠けては、到底平和を持續することは出來ません。約翰傳十四〇十五にある通、汝等我を愛せば、我誡を守れ。神を愛する家庭は、その律法に從ふから、聖きものとなるのである。人を愛し、神を愛する家庭こそ、理想的家庭ではありますまいか。然らば主の誡、即ち律法とは何であるか、安息日を守りて、神のよろこび給ふまゝに、この日を過すのは、その大切なる誡の一である。

ある信者はいふ、今の世の中では、安息日を守ることが出來ないと、然し一家擧つて信者である處に、何でこの日の守れないことがありませう。出來ないのは、必竟愛が足りないからである、神を敬ふ心がないからである、注意が足りないからである。その身を神の心にかなふ、活ける供物として献げたる一家の中に、安息日が守れないといふ筈がないのである。

播州に信者の一家族がある。この家はもと貧しくて、あはれな店に『壽し』をこしらへて、渡世をして居つたが、ふと基督敎を耳にして、信仰を起してから、神に賴る心が盛になつて、家族のものは皆なよく神の誡を守るやうになりました。その頃は、まだ信仰の自由もなく、この敎の名を聞くことさへ、いやがる人々が多かつた位で、この家は甚しく迫害を受けたが、それにも係らず、ます〳〵信仰を強くして、安息日に商賣をするやうな事は、神のみ旨に背くことであるといつて、斷然店を閉ぢて、神の敎を學び、神を拜することを專らとして居つた。然るに人々はこの事を聞きつけて、一層烈しく迫害を加へた、これ迄は、人足の絶えなかつた店頭が、にはかに淋しくなつて、家族は糊口の道を失つたといふ有様である。けれども彼等はます〳〵神にすがつて祈りながら、一つ考へ出したのは、これ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

までの『壽し』よりずつと大きく、味よく、代を安くして市中を賣つて歩くことにしたのである。すると人々が先を爭つて買ふ。まづこれで危急を逃れることが出來たのである。その後この一家は、ます〳〵信仰を強くして、安息日の午前には、家主を始め、僕婢に至るまで、皆な禮拜のため敎會に集り、午後には神からうけた惠を人々に分與する積で、手を分つて、未信者を訪ひ、病人を見舞ひ、信仰の衰へた人を尋ねて、大に力を盡してゐるといふことである。かゝる家庭こそ、貧しきにも、富めるにも、神にありて常に成すべきことを知れる人々であると思ふ。この家庭に入ると、きよい、温い心持を人々にさせる。これは神のめぐみが家中に溢れてゐるからである。

實際この家族に親しく接した人から、この話を聞いた時、我國にも、こんな家庭が多くなるやうに切望せざるを得なかつた。

安息日の守りかたにも、種々ありませうが、これを平常の日と全くちがつた樣に過すべきである。神の定め給うた日、心靈の休養をする日として、きよく送るべきである。一家として、午前には子供等を日曜學校に赴かせ、夫妻は禮拜を守り、午後は打揃つて、感謝の祈禱を献げ、讃美をなし、殊に老人や子供には、この日を最もたのしく、きよく過ごさせるやうにしたいのである。神は、この日に人々が苦しむのをお好みなさりません、すべての人々の心に、けだかい樂みを感じさせ、その靈魂を高くひきあげたいと望み給ふのである。只自分ばかりでなく、他人のためにも、かく計りたいのである。されば淋しき人や、病めるものを見舞つて、これを慰め、神を知らぬ友あらば、これに救を說き、どうかしてすべてのものが、この日を以て、心靈に生命を得、活氣を得て、全く新しき一週日を送るやうにしたいのである。

安息日をきよく守るには、土曜日が最も注意すべき大切な日である。土曜日にちやんと翌日の仕度をして置けば、安息日にいろんな妨が起る氣遣はない。むかし荒野を旅したイスラエル人も、土曜日には、日曜日

のと二日分のマナを拾つたではありませんか。
願くば、我國の家庭が、いま一きはきよくこの安息日を守つて、理想的家庭を實現する時が速かに來るやうに祈るのである。

雜録

●女子青年會夏期會合

去月十四日東京に於て、日本女子基督敎青年會委員相集りて、諸種の重要なる事項を評議したるが、これと共に、來年女子青年會夏期會合を開設するの件をも議決したり。米國に於ける夏期會合が、男女學生の宗敎的生活に貢献する處頗る大なるものあるを認め、また日本に於ける男女學生の夏期學校の功果如何を知れるものは、また日本の女子青年が、夏期に於て、その一週間を聖書の研究と、交際の習熟とに費して、或は故郷に歸り、或は學校に歸るの日、ます〳〵神につかふるの念を深からしむべきこの會合を歡迎せざるを得ざるべし。本會合の經營については、時々本誌上に掲げて、讀者諸君に報道する處あるべし。故にこの際女子青年に對して同情を有する人々は、この會合が我國女子青年の生活に大なる精神的効果を及ぼさんことを祈られんことを希望す。

●小石川女子傳道學校内女子青年會創設の狀況

（書記、伊藤しづ子報告）

我等が、いつくしむ青年女子の君たちよ、小妹等はキリストのみたすけによりて、今新に諸姉と聯絡するの好機を得たるを感謝いたし候。
さきに小妹等、『明治の女子』によりて、女子青年會の設立せられたることを知り、私に大に賛成して、そのます〳〵盛大に赴かんことを祈り、かつ及ぶべくんば、小妹等もその事業に微力を致さまほしく存居候ひしが、悲しいかな、いかに爲すべきかを知ること能はざりき。然るにキリストは小妹等の心を察して、一人の姉妹を遣はして、今回漸くわが青年會を設立せしめ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

給ひぬ。その次第を申せば、去九月十七日にマクドナルド嬢わが校に臨みて、本會設立につき熱心に勸誘せられしかば、小妹等一同大にうちよろこび、遂に九月廿九日いよ〳〵設立の運に至り候。後選擧を以て、武士を會長に、伊藤を書記に、川名を會計に相定め候。會員はすべて二十名にして、内十四名は正會員、他は準會員に候。

本會は微弱なること、誠に赤子の如くに候へども、キリストのみ乳により、また諸姉のみ助によりて、いよいよ發達し、愛を以て誠を行ひ、成長して各自の分量に從ひ、主のために、働かんことを熱望いたし居候願くは本會のため、諸君の御祈を萬望いたし候。

月草

しづのや

一片の葉書といへども、忙しき友の少閑を偸みて、遙に懷をわれに寄せつゝ、筆とりしなるかと思へば、うれしくも、またなつかし。

『あはれ』を知らぬ人ほど、世に憐むべきものはあらじ。かゝる人は、到底他の趣味を解すること能はず、他に同情を表すること能はず。故に多くの場合に於て、彼は孤獨の生活を送るを免れず。然かもおのれは、その身の孤獨なることを感得せざる也。これに反して『あはれ』を知れる人は、他のために心力を勞することと極めて多し。敢て報償を望んでしかするにあらず、敢て故造を以てしかするにあらず、只彼が心の琴線の微妙鋭敏なる、いさゝかの悲哀に接するも、いさゝかの喜樂に會するも、忽ち嫋々の音を發して、これに應ぜずんば止まざる也。われ基督に於て、後者の範を見る。

熱閙の裡より遁れて、半日を心ゆく友と靜けき野邊に語る。たのしみこれに過ぐるなし。

無常の裡に、有常を觀ぜざるが故に、世を厭ふの悲を生じ易く、有常の裡に、無常を認めざるが故に、世に醉ふの樂に耽り易し、この兩極を達觀したるものにして、初めて人生の眞趣味を掬するを得べし。

平等は友愛を生む。平等の觀念なき家庭にして、未だ友愛の情に滿つるものあるを見ざる也。（三十八年十月稿）。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

have played in the deepening of the religious life of the college men and women of America, and those who know something of the results from such meetings among the young men students of Japan cannot but welcome this opportunity for young women, to meet together for a week's Bible Study and social intercourse in order that they may go back to their homes or school better fitted for serving their Master. From time to time the plans will be made known through this magazine and it is urged that all those who are intérested in young women will begin to pray definitely that this gathering will be fraught, with great spiritual results in the lives of young women.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

In October, 1896, she entered the Cambridge School for Young Ladies to be prepared for Radcliffe Collegee Miss Sullivan attended the classes with her pupil, and interpreted everything to her. Helen's course of study for the first year comprised English history and literature, German, Latin, Arithmetic, Latin Composition ana occasional subjects. In her second year she studied Physics, Algebra, Geometry, Astronomy, Greek and Latin. The Algebra and Geometry, especially the latter, presented great difficulties, as she could not follow with her eyes the examples drawn on the blackboard, so she adopted the device of making the geometrical figures on a cushion with straight and curved wires which had bent and pointed ends. Thus her indomitable will surmounted all difficulties both in study and examinations. At last in 1900, she reached the goal of her ambition and entered Radcliffe College. In 1904, after four happy years at College, Helen graduated with the degree of B. A.

A truly wonderful record! But as Helen Keller herself acknowledges, she could not have achieved all that she has, but for the devoted care and assistance of her inseparable friend and teacher, Miss Sullivan. This is Helen's loving tribute to her:

"My teacher is so near to me that I scarcely think of myself apart from her. How much of my delight in all beautifui thing is inate, and how much is due to her influence, I can never tell. I feel that her being is inseparable from my own, and that the footsteps of my life are in hers. All the best of me belongs to her—there is not a talent or an aspiration or a joy in me that has not been awakened by her loving touch."

"*Young women of India and Ceylon.*

SUMMER CONFERENCE FOR YOUNG WOMEN.

The quarterly meeting of the Committee of the Young Women's Christian Association of Japan was held in Tokyo on Saturday afternoon, Oct 14th, the following members being present,—Miss Whitman (Chairman) Mesdames Fisher, Helm and Misses Zurfluh (Sendai), Lewis (Yokohama), West, Tsuda, Kawai—Ellis, Sato, of Tokyo and Miss Macdonald the Executive Secretary of the Committee. Among the very important business transacted was the resolution to have a Summer Conference for young women next year, and Mrs. Fisher and Mrs. Hibbard were appointed to under take the arrangements. Those who have seen the large place the American Summer Conferences

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

description of the world. Her teacher made raised maps in clay, so that Helen could feel the mountain ridges and valleys, and with her fingers the course of rivers. Helen also learned zoology and botany, and on beginning arithmetic, Miss Sullivan taught her to count by means of beads, and to add and subtract by the arrangement of kindergarten straws.

In 1890 a great event happened to Helen Keller. A lady who had just returned from a visit to Norway and Sweden went to see Helen and told her about Ragnhild Kaata, a Norwegian blind and deaf girl, who had been taught to speak. When Helen heard this, she was all on fire to learn to speak likewise. All her life the impulse to use her vocal organs had been very strong, and she would make noises, keeping one hand on her throat while feeling the movements of the lips with the other. She had known for a long time that people around her communicated with one another in a different way to hers, and the child had always desired keenly to do as they did. Her longing for speech increased with the knowledge that another blind and deaf child had attained to it, and on March 26th, 1890, this part of her education was undertaken by Miss Sarah Fuller, Principal of the Horace Mann School for the Deaf. Helen's account as usual is most interesting. "Miss Fuller's method was this: she passed my hand lightly over her face and let me feel the position of her tongue and lips when she made a sound. I was eager to imitate every motion. and in an hour had learned six elements of speech: M. P. A. S. T. I. Miss Fuller gave me eleven lessons in all. I shall never forget the surprise and delight I felt when I uttered my first sentence, 'It is warm.' True, they were broken and stammering syllables, but they were human speech. My soul, conscious of new strength, came out of bondage, and was reaching through those broken symbols of speech to all knowledge, and all faith." In course of time, aided by Miss Sullivan's genius, untiring perseverence and unselfish devotion, as well as through sheer hard work and incessant practice, Helen attained her desire, and is now able to converse with her family and intimate friends in speech. In the process of learning to speak, Helen acquired lip-reading as well, by placing her fingers on the speaker's lips. She now uses this method, and is quite expert at it. Miss Sullivan and a few freinds employ the finger alphabet, as being quicker and more certain of comprehension on Helen's part.

In 1894 Helen went to a school for the deaf in New York, accompanied by Miss Sullivan and studied there for two years, learning Physical Geography, French and German.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

was the name of the process that was going on in my head. This was my first conscious perception of an abstract idea. For a long time I was still. I was not thinking of the beads in my lap but trying to find a meaning for "Love" in the light of this new idea. Suddenly the sun broke forth in all its southern splendour. Again I asked my teacher "Is this not love?" "Love is something like the clouds that were in the sky before the sun came out," she replied.

"You cannot touch the clouds, you know; but you feel the rain and know how glad the flowers and the thirsty earth are to have it after a hot day. You cannot touch love either, but you feel the sweetness that it pours into everything. Without love you would not be happy or want to play." The beautiful truth burst upon my mind. I felt that there were invisible lines stretched between my spirit and the spirits of others."

From the beginning Miss Sullivan made a point of talking to her pupil as to a hearing child by means of spelling into her hand. Thus Helen learned all the idioms and colloquial expressions generally used in conversation, and in course of time was able to join in social intercourse with intelligence and interest. For a long time she had no regular lessons, but drank in knowledge as through every part of her being. She and her teacher lived almost entirely out of doors. Helen's description of her education at this period is worth quotingo "All my early lessons have in them the breath of the woods—the fine resinous odour of pine needles, blended with the perfume of wild grapes. Seated in the gracious shade of a tulip tree, I learned to think that everything had a lesson and a suggestion. 'The loveliness of things taught me all their use.' Indeed everything that could hum or buzz or sing or bloom had a part in my education; noisy-throated frogs, katydids and crickets held in my hand until, forgetting their embarrassment they trilled their reedy note, little downy chickens and wild flowers, the dogwood blossoms, meadow violets, and budding fruit trees: I felt the bursting cotton balls and fingered their soft fibre and fuzzy seeds; I felt the low soughing of the wind through the cornstalks, the silky rustling of the long leaves, and the indignant snort of my pony as we caught him in the pasture and put the bit in his mouth. Ah me! how well I remember the spicy, clovery smell of his breath!"

It is hard to realise that this is written by one destitute of hearing and sight! Helen goes on to describe how she learned geography by playing with a spade and making islands and lakes and digging river-beds, and listening to Miss Sullivan's

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

meaning. In this way during some weeks Helen learned to spell a great many words like pin, hat, cup, and verbs like sit, stand, and walk, but still without understanding what they signified. One eventful day Miss Sullivan tried to make her pupil understand that "mug" was a mug and not water; and vice versa, but in vain; the child could not grasp the connection. So her teacher took Helen into the garden where someone was at the pump and placed the child's hand under the spout. As the water splashed over one hand Miss Sullivan spelled on the other hand the word "water," first slowly and then rapidly, Let Helen describe in her own words her soul's sudden awakening. "I stood still, my whole attention fixed upon the motions of her fingers. Suddenly I felt a misty consciousness as of something forgotten—a thrill of returning thought: and somehow the mystery of language was revealed to me. I knew then that "w-a-t-e-r" meant the wonderful cool something that was flowing over my hand. That living word awakened my soul, gave it light, hope, joy, set it free; from that moment everything had a name, and each name gave birth to a new thought. Every object which I touched seemed to quiver with life. That was because I saw every thing with the strange new sight that had come to me."

Helen had now the key to all language and her progress was assured. It was of course gradual, and some time elapsed before she was able to grasp abstract ideas. The account of her first introducution to is them interesting. One day she asked her teacher the meaning of the word "love." Miss Sullivan replied "it is here," pointing to the child's heart. Helen was puzzled because she could not understand anything unless she touched it. Holding some violets in her hand, she enquired, half in words, half in signs, "Is love the sweetness of flowers?" On receiving a negative, she considered a few moments. Feeling the warm rays of the sun shining on her, Helen asked, "Is this not love?" and pointed in the direction from which the heat came. Again her teacher shook her head. The child was surprised and disappointed. She thought it strange that Miss Sullivan could not show her what love was. A day or two afterwards a ray of light flashed into Helen's mind. She was stringing beads of different sizes in symmetrical groups. and had made many mistakes which were pointed out to her again and again. Finally she noticed a very obvious error in the sequence, and she was considering deeply how the beads should have been arranged. Miss Sullivan touched her forehead and spelled with strong emphasis, "think."

"In a flash I knew that the word

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

lot of many who have been deprived of these two senses of sight and hearing. But within the last century brighter days have dawned for the blind and deaf and Helen Keller is a shining example of the remarkable progress that has been made in their education.

Helen Keller was the eldest child of Arthur H. Keller, a captain in the Confederate Army in the American Civil War, and was born with all her faculties on June 27th, 1880. At the age of nineteen months she was attacked by a severe illness which left her completely blind and deaf. She had learned to say a few words and after her illness she remembered the word "water," and continued to make some sound for it after all other speech was forgotten. Being naturally a bright child, Helen soon began to use ber hands as a vehicle of communication and information, and thus managed to pick up an astonishing amount of knowledge. A shake of the head meant, "no," and a nod "yes," a pull meant "come," and a a push "go." If Helen wanted bread she imitated the acts of cutting the slices and buttering them. Her mother, being a sensible and intelligent woman, co-operated with the child's attempts to communicate with the outside world, and kept Helen constantly with her, even taking her out visiting.

At the age of six, Captain Keller took Helen to see Dr. Alexander Graham Bell of Washington, and consulted him about the child's education. The result was that a teacher was found for Helen, Miss Sullivan, destined to become of world-wide renown through the wonderful training of her pupil. Helen thus expresses her feeling about Miss Sullivan's advent in her autobiography:—"Thus I came up out of Egypt and stood before Sinai, and a power divine touched my spirit and gave it sight, so that I beheld many wonders. And from the sacred mountain I heard a voice which said, "Knowledge is love and light and vision."

This most important epoch in Helen's life is dated March 3rd, 1887, within three months of her seventh year.

Miss Sullivan made her first attempt at instruction on the morning after her arrival at the Keller homestead. She led Helen into her room and gave her a doll dressed by Laura Bridgeman (a well-known American deaf and blind woman). When Helen had played with the doll a little while her teacher slowly spelled the word "doll" on the child's hand. Helen quickly tried to imitate this finger play and when at length she succeeded in forming the letters correctly, her pride and joy knew no bounds. She was, however unconscious that she was spelling a *word*, or that it had any

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

an uncertain target, and only one bullet struck her, wounding her slightly. All my ammunition was soon gone. Then, with empty rifle in one hand and hunting-knife in the other, I lifted up that mightiest of all weapons—prayer to God; not a nicely formulated prayer, just the wordless expression of a desperate need. But it was enough: The infuriated beast had gotten within seventy yards when without apparent cause—but God—she suddenly turned at right angles and dashed away. The day of miracles past? Never! So long as the God of miracles lives and reigns, so long will he manifest His power to deliver His own in peril. What became of the rhinoceri? Frightened by the charging lioness or the reports of our rifles, they had run away, and when we turned to look for them, they were nowhere to be seen."

銃と獵刀とを兩手にとり持ちつゝ、すべての武器にまさる祈禱を神にさゝげたり。祈禱とはいへど、危急の際、言葉もとゝなはぬ希求の叫に過ぎざりき。されど只これにて足りしこそうれしけれ。くるひに狂ひて、七十ヤードも間近く進み來りし獅子は、いかゞしたりけん、俄に直角にその方向を轉じて遁れ去れり。これをしも神のみ業といはずば、他にその理由を發見するを得ず。奇蹟の時代既に去れりといふか。否決して然らず。奇蹟の神存在して、この世をすべ給ふ間は、その子供の危險の裡にあるを救ふために、彼は絶えずその力を顯はし給ふべし。さるにても、かの犀はいかにせしや、獅子の勢に恐れしか、或はまた我等の銃聲に驚せしか、何處へか逃げさりて、かた影だも認むるを得ざりき。

HELEN KELLER.

Before entering into the history of this remarkable girl, I would ask my readers to try and imagine what it must be to be both blind and deaf. If you stop up your ears so that no single sound can enter your brain, you still have the use of your eyes to convey to it impressions of all that can be *seen*. You can then realize the possibility and practicability of lip-reading as a means of communication with the hearing world for the deaf. But proceed to bandage your eyes while having your ears stopped up, and you will dimly realize what a prison-house your soul is confined in! If such a soul cannot be reached in childhood and educated and trained to use its mental powers, the whole life must be lived in a state of appalling mental vacancy. This has been the sad

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

"One morning we were crossing a ravine, when we discovered five lions on a rocky prominence jutting out from the hillside, about two hundred and fifty yards to our left. On the crest of the ridge was a clump of trees which would afford us safety, but to reach them we had to pass in full view of the lions. As we started up they began to pace up and down on their rocky platform, and lash the ground with their tails in a manner that boded ill to us. We did not dare to take our eyes off them for an instant. At length, to our relief, the lioness, taking her three full-grown cubs, disappeared from view. She was the dangerous factor, and I now dared to turn to see how near we were to the rocks. Judge my amazement when I saw the way blocked by two huge rhinoceri, which had evidently come up in the meantime, and, being short-sighted animals, had not seen us.

ある朝、我等は峡谷を過ぎりゐたりしに、左の方二百五十ヤード許隔てゝ、山腹より突出せる岩角の上に、五匹の獅子あるを發見せり。山頂には木立の隱處もありしかど、此處に達するには、獅子より明かに認めらるゝ地を通過せざるべからず。かくて我等が起ちあがりし時、獅子は岩の上を徊徘し始め、その尾もて地面を打つさま、何となく危害の將に落ち來らんとするを豫示するが如くなりき。しばしわき眼もふらず、獅子を凝視せしに、うれしや、牝獅子は三匹の大いなる仔獅子を伴ひて、何處へかその姿を隱したり。この獅子こそ、最も我等を懼れしめたるものなりしかば、今や漸く安堵して、我はその岩角との距離を計らんものと振り返りしに、こはそもいかに、二匹の大なる犀、我等の前路を遮れるを見る。この時の驚愕いかばかりなりしぞ。こはたしかに我等が獅子の方にのみ心を奪はれゐたりし隙に、こなたへ上り來りしものとおぼし。犀は近視眼の獸なれば、我等が近くゐたりしことを覺らざりしならんか。

There was nothing to do but turn back. I had just broken the intelligence to my companion when a blood-curdling roar fairly lifted us from our feet, and we turned to see the lioness dash down the rocks and come bounding toward us! With every leap she emitted a roar of defiance that made the rock vibrate. Just for an instant we forgot ourselves and started to run but seeing the folly of it, kneeled down and began to fire at her. But she was

今は引返すの外、他に道なきを以て、これを友に告ぐる間もあらせず、足下に聞ゆる吼一聲、我等は覺えず戰慄したり。と見れば、以前の牝獅子は岩角を馳せ下りて、我等に向つて突進し來るなりき。一躍する毎に、吼聲を發して、戰を挑むものゝ如く、岩も震駭するばかりなりしかば、我等はしばし、われを忘れて馳せ出したれど、やがて事の及ばざるを悟り、跪いて携へたる銃とりあげ、彼をめがけて發砲せり。されど獅子は猛りにたけりて馳せ來りければ、ねらひも定めがたく、僅に一彈輕くそを傷けたるのみにて、彈丸最早盡きたり。今ははや他にせん術なきを以て、空

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

UNANSWERED YET.

Unanswered yet! the prayers your lips have pleaded
In agony of heart—these many years?
Does faith begin to fail? Is hope departing?
And think you all in vain these falling tears?
Say not the Father hath not heard your preyer,
You shall have your desire, sometime,—somewhere.

Unanswered yet! Nay do not say ungranted,
Perhaps your work is yet not wholly done,
The work began when your first prayer was uttered,
And God will finish what He has begun.
If you will keep the incense burning there
His glory you shall see—sometime, somewhere.

Unanswered yet! though when you first presented
This one petition at the Father's throne
It seemed you could not wait the time of asking
So urgent was your heart to make it known.
Though years have passed since then do not despair,
The Lord will answer you, sometime, somewhere.

Unanswered yet! Faith cannot be unanswered!
Her feet are firmly planted on the rock;
Amid the wildest storms she stands undaunted,
Nor quails before the loudest thunder shock.
She knows Omnipotence has heard her prayer,
And cries, "It shall be done, sometime,—somewhere.

Browning.

ANSWERED PRAYER.

The following incident occurred a few years ago to a missionary in Central Africa, Mr. Hotchkiss of the American Friend's Mission, which illustrates with great vividness the fact that God does answer the prayers of his children and the ground for confidence we have in Him that no evil shall befall us who put our trust in Him.

祈禱の應驗

左に揭ぐる物語は、數年前中部亞弗利加にありし米國フレンド傳道會社の宣教師ホッチキス氏の實驗せる處にして、神がおのれの子供の祈禱に應へたまふ事實を明に例證し、すべて神を信ずるものは決して災害に遇ふとあるまじとの信仰を、いよいよ堅くせしむるもの也。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

women it is specially necessary that we unite our prayers that God will sanctify the young womanhood of the world for His own use. "No nation" said an eminent statesman "rises higher than its women," and if this is so as we believe it to be, how necessary is it at this time in the history of Japan, to be instant in prayer and supplication that Jesus Christ may be crowned King in every young woman's life, to the end that this nation may be established in righteousness founded upon the Rock, Christ Jesus.

Shall we not pray that Christian young women may realize in a new way the responsibility of their stewardship in spreading the knowledge of Jesus Christ, that those who have heard about the Saviour but who have not yet come to Him, may be convicted of sin and come to Him who is able to save to the uttermost, and that many who have never heard whether there be a Saviour of the world may know that He has come, in whom dwelleth all the fulness of the Godhead bodily.

"Why should we therefore do ourselves this wrong,
And others, that we are not always strong?
That we are ever overborne with care,
That we should ever weak or heartless be,
Anxious or troubled when with us is prayer,
And joy and strength and courage are with thee."

ことを祈るは、特にその必要なるを見る。名だかき一政家曰く、いかなる國民といへどもその價値は該國の婦人の上に出でずと。我等が信ずる如く、その言果して眞ならば、わが邦が、キリスト、イエスなる磐石の上に、正義を以て樹立するに至るまで、すべての青年女子が、主を以て王となさんことを懇求熱禱するは、豈に目下の急務にあらずして何ぞや。

我等は基督を信ずる青年女子が、新しき方法に依りて主の教を宣傳すべき使命を實現し而して既に救主につきて聞きながら、未だ彼のもとに來らざりし人々が、いよいよその罪を悔ゐて、おのが救を完うすることゝ、また世に救主あることさへ、未だこれを耳にせざる人々に、神のみち足れる德を悉くその身に體現せる主の降世を知らしむることを祈るべし。

『果して然らば、我等は祈禱を献げて、歡喜と勇氣とを抱くべきに、何を以てか、自ら不健全に、杞憂を以て心を勞し、軟弱冷酷にして、己れを傷ひ、また他を害ふことをするぞ。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

who have been prayed into the kingdom. How earnestly Isaiah urged the people to pray down blessing! "Ye that are the Lord's remembrancers, take ye no rest, and give Him no rest, until he make and until he establish Jerusalem a praise on the earth." "God forbid," said Paul, "that I should sin against the Lord in ceasing to pray for you." How wonderfully faithful to the truth was Tennyson when he put those wonderful words into King Arthur's mouth just before his death,—

"More things are wrought by prayer,
Than this world dreams of. Wherefore let thy voice,
Rise like a fountain for me night and day.
For what are men better than sheep or goats
That cherish a blind life within the brain,
If knowing God, they lift not hands of prayer,
Both for themselves and those who call them friend?
For so the whole round world is every way,
Bound by gold chains about the feet of God."

『我は汝らのために祈ることをやめて、エホバに罪を犯すことをせざるべし。』
アーサー王將に死せんとするや、テニソン彼の口をかりて歌うて曰く、
『祈禱によりて成さるゝことは、この世が夢に結ぶ處のものにもまして、いといと多し
されば夜もひるも、泉の如く、汝の聲をあげよかし。神を知りて、しかもおのれと、
おのが友のために、祈禱の手をあげざる人は、自らおもひなやみて、徒に朽ちはつる
羊や、山羊と何の選ぶ處かあらん。げに全世界は、到る處、黃金の鎖もて、神のみ足
の邊につながる。』

The young women who are in schools have special opportunities of using this week for united prayer because of being all together during a greater part of the day. In these days of transition for young

學校にある女子青年は、一日の大部分を他の學生と共に過ごすを以て、この同盟祈禱週日を用ゆるに、格段の機會を有する也。かく女子青年のために設けられたる更革の時期に臨み、共に心を同うして神がおのれのために用ゐんとて、世界の女子青年をきよめ給はん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II　　November, 1905　　No. 7

THE WORLD'S WEEK OF PRAYER FOR YOUNG WOMEN.

During the week beginning Sunday November 12th young women in every part of the world will unite in prayer to God for the coming of his kingdom in the hearts of all young women. That prayer is the mightiest weapon we can wield in this warfare against sin, not only do the example and teaching of Jesus Christ emphasize, but the whole history of the church, and the experience of every believer attest the reality of the power of prayer. And this world-wide union of prayer has a wonderful significance. What it will mean to the young women of Japan, that on Thursday, November 16th, young women in Great Britain, America, Europe, Africa, Australia, India and China will be praying specially for the Japanese young women, we shall never fully know until that day when the redeemed of the Lord shall stand before the throne and worship the king in the beauty of His holiness: and among them shall be those from every nation and kindred and tongue

萬國女子青年祈禱週日

十一月十二日の安息日より一週間、世界各地の女子青年相一致して、すべての女子青年の心に、神の王國の來ることを祈らんとす。

罪惡と戰ふに當りて、我等が揮ひ得べき銳利なる劍は、祈禱に如くものなし。祈禱の力の事實上偉大なるものあることは、單に耶蘇基督が遺し給へる摸範と敎訓とによりて、これを知り得るのみならず、敎會の歷史に徵するも、また信者の經驗に訴ふるも、等しくこれを證するを得。而してこの萬國祈禱同盟には、實に驚くべき一個の意義を有する也。

十一月十六日を期して、歐米諸國、亞弗利加、墺太利、印度及び支那が特に我國女子青年のために祈る處のもの、果して如何なる意義を存するか、我等は主の贖ひたまへる民等の、かの寶座（みくらゐ）の前に立ち、うるはしき榮光の裡に、王を拜しまつるの日に至らざれば、到底明かにこれを知ること能はざるべし。而してその日には、これらの民のうちに、祈禱によりて主の王國に導かれたる諸國諸族諸音の人々を見るべし。以賽亞熱心に、民等に勸むるに、神の祝福を祈求せんことを以てせり、曰く、

『なんちらヱホバに祈念をしたまはんこと求むるものよ、自らやすむなかれ。ヱホバヱルサレムをたてゝ、全地に譽をえしめ給ふまでは、息め來るなかれ。』

保羅は曰く、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II November 1905 No. 7

The "Young Women of Japan" is a Bible Study Monthly for young women published by the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan Price 50 sen a year. Four *sen*, five *rin* a copy. Address 15 Dote Sambancho Kojimachi, Tokyo.

Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan.

Miss M. A. Whitman, Chairman.
Miss Amy G. Lewis, Secretary.
Miss Ume Tsuda.
Miss A. B. West.
Mrs. G. K. Hanai.
Miss H. J. Worthington.
Mrs. V. W. Helm.
Mrs. G. M. Fisher.
Miss L. Hamilton.
Mrs. G. S. Phelps.
Miss L. Zurfluh.
Mrs. H. Kozaki.
Miss H. Hirano.
Miss S. Ellis.
Miss E. M. Soper.
Miss Kawai.

Miss Kin Sato.

Miss A. Caroline Macdonald
Miss Theresa E. Morrison } Secretaries of the World's Young Women's Christian Association in Japan.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十八年十一月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

"Not by might, nor by power, but by my Spirit, saith the Lord of Hosts. Jech. 4: 6.

World's Y. W. C. A. Motto.

Vol. II November 1905 No. 7

YOUNG WOMEN OF JAPAN

CONTENTS.

The World's Week of Prayer for Young Women.
Editor.
Browning.
"Unanswered Yet."
Answered Prayer.
Life of Helen Keller.
Association Notes.
Program of Week of Prayer, Nov. 12—18.
Bible Study. *A. C. Macdonald.*
Happy Life. *Y. Noguchi.*
Life in a Women's College in America. *M. Kanai.*
Sunday in the Ideal Home. *T. Furuta.*
Monthly Thoughts. *T. Idzuno.*

15 Dote Sambancho, Kojimachi, Tokyo.